

# 明治三十二年頃

寺田寅彦

青空文庫



明治三十二年に東京へ出て来たときに夏目先生の紹介ではじめて正岡子規しきの家へ遊びに行った。それとほとんど同時に『ホトトギス』という雑誌の予約購読者になったのであったが、あの頃の『ホトトギス』はあの頃の自分にとつては実にこの上もなく面白い雑誌であつた。先ず第一に表紙の図案が綺麗で目新しく、俳味があつてしかも古臭くないものであつた。不折ふせつ、黙語もくご、外面とのも諸画伯の挿画や裏絵がまたそれぞれに顕著な個性のある新鮮な活気のあるものであつた。現在のようなジャーナリズム全盛時代ではおそらく大多数のこうした種類の挿画や裏絵は執筆画家の日常の職業意識の下に制作されたものであろうと思うが、あの頃の『ホト

トギス』の上記の画家のものはいかにも自分で楽しみながら描いたものだろうという気のするものばかりである。どうしてそんな気がするか分らない。一つにはこれらの画家が子規と特別な親交があつて、そうしてこの病友を慰めてやりたいという友情が籠つていたであろうし、また一つには当時他に類のなかつたオリジナールでフレッシな雑誌の体裁を創成するということに対する純粹な芸術的な興味も多分に加わつていたために、おのずから実際に新鮮な活気が溢れていたのではないかとも思われる。こうした活気はすべてのものの勃興時代にのみ見られるものであつて、一度隆盛期を通り越すと消えてしまう。これはどうにも仕様のないものである。

たしか浅井和田両画伯の合作であったかと思うがフランスのグレーの田舎へ絵をかきに行った日記のようなものなども実に清新的薫りの高い読物であった。その内容はすっかり忘れてしまったが、それを読んだときに身に沁みた平和で美しいフランスの田舎の雰囲気だけが今でもそっくり心に残っているようである。

「やみじるかい闇汁会」や「ゆみそかい柚味噌会」の奇抜な記事などもなかなか面白いものであった。これなども具体的内容は覚えていないが、この記事で窺われた当時の根岸子規庵の気分と云ったようなものだけははつきり思い出すことが出来る。

その頃すでに読者から日記や短文の募集をしていた。自分も時に応募していたが、自分の書いた文章が活字になったのは多分そ

れが最初であつたと思う。理科大学の二年生で西片町にしかたまちに家を持つていたその頃の日記の一節を「牛頓日記」と名づけて出したことがある。牛頓はニュートンと読むのであるが実に妙な名前をつけたものだと思う。もつとも二年生するとき牛頓祭という理科大学学生年中行事の幹事をさせられたので、それが頭にあつたためかもしれない。また、短文の方は例えば「赤」とか「旅」とかいう題を出して、それにちなんだ十行か二十行くらいの文章を書かせるのであつた。何という題であつたか忘れたが、自分が九歳の頃東海道を人力車で西下したときに、自分の乗っていた車の車夫がひのきがき檜笠ひのきがきを冠っていて、その影が地上に印しながら走つて行くのをしいたけ椎茸しいたけのようだと感じたと見えてその車夫を椎茸と命名したと

いう話を書いた。子規がその後時々自分に「あの椎茸のようなのはもつとないかね」と云ったことを思い出す。あの頃の短文のよ  
うなものなども、後に『ホトトギス』の専売になった「写生文」と称するものの胚芽はいがの一つとして見ることも出来はしないかという気がする。少なくとも自分だけの場合について考えると、ずっと後に『ホトトギス』に書いた小品文などは、この頃の日記や短文の延長に過ぎないと思われる。

裏絵や凶案の募集もあって数回応募した。最初に軒端まわりどの廻燈まわりど籠ろうろうと梧桐あおぎりに天の河を配した裏絵を出したら幸運にそれが当選した。その次に七夕たなばた棚たなかなんかを出したら今度は見事に落選した。その後子規に会ったとき「あれはまずい、前のと別人のよう

だと不折が云つていた」と云われた。その後、冬木立の逆さかさま様に映つた水面の絵を出したらそれは入選したが、「あれはあまり凝こり過ぎてると碧梧桐へきごとうが云つたよ」という注意を受けた。

やはりその頃であつたと思うが、子規が熟柿を写生した絵を虚よし子が見て「馬の肛門かと思つた」と云つた。それを子規がひどく面白がつて「しかし本当にそう思つたんだから」ということを繰返し繰返し言い訳のように云うのであつた。

募集した絵をゆつくり一枚一枚点検しながら、不折や虚子や碧梧桐を相手に色々批評したり、また同時に自分の描いておいた絵を見せたりして閑談ふけに耽ふけるのがあの頃の子規の一つの楽しみであつたらうということも想像される。



ともかくもあの頃の『ホトトギス』には何となしに活々いきいきとした創成の喜びと云ったようなものが溢れこぼれていたような気がするのであるが、それは半分は読者の自分がまだ若かったためかもしれない。しかしそうばかりでもないかもしれない。食物に譬たとえれば栄養価は乏しくても豊富なるビタミンを含有していた。そうして他にはこれに代わるべき御馳走はほとんどなかった。それが、大正昭和と俳句隆盛時代の経過するうちに、栄養に富んだ食物も増し料理法も進歩したことはたしかであるが同時にビタミンの含有比率が減つて来て、缶詰料理やいかもの喰いの趣味も発達し、その結果敗血はいけつしょう症の流行を来したと云ったような傾向がないとも限らない。

こうした輪廻サイクルの道程がもう一步進んで墮落と廢頹の極に達し  
 俳句が再び「宗匠」と「床屋」の占有物となる時代が来ると、そ  
 こではじめて次の輪廻の第一歩が始まるのではないかという気も  
 する。その前にはどうしても一度行きつくところまで行く必要が  
 あるであろう。

事によると明治維新後の俳句の眞の黄金時代はかえつて明治三  
 十年代にあつたのではないかという気もするのである。もちろん  
 これは自分等の年輩のもの自分勝手な見方ではあろうが、こう  
 した見方もあるいは現代の俳人に多少の参考にはなるかもしれな  
 いと思つたので思い出話のついでに拙よまいごとない世迷言を並べてみた  
 次第である。

(昭和九年九月『俳句研究』)





# 青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1996（平成8）年12月5日発行

底本の親本：「寺田寅彦全集 第五巻」岩波書店

1985（昭和60）年12月5日第2刷発行

初出：「俳句研究 第一巻第七号」

1934（昭和9）年9月1日発行

※初出時の表題は「明治卅二年頃」です。

※初出時の署名は「寺田寅日子」です。

入力：Nana ohbe

校正：松永正敏

2004年3月24日作成

2016年2月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 明治三十二年頃

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>